

作者シェクスピアは訪れてはいない！？

「生きるべきか、死ぬべきか」＝真実の道さぐる人間の懊悩



クロンボー城の入り口

6月の初旬。コペンハーゲン中央駅から列車で北上すること約50分、ヘルシンゴー駅に到着した。レールも車両幅も広いためか、かなりのスピードなのに揺れが少ない。車窓の両側には菜の花畑の黄色と麦畑の青さが遠くまで広がっている。国土の60%が耕作可能という豊かなデンマークの農業事情を映し出しているようだ。

4人が向かい合う形の座席。目の前には太った恰幅のよい紳士が座っていた。旅は道連れ。私は「東京から来たカメラマンです」と自己紹介。途中で車掌が検札にきた。私の切符を見るやデンマーク語で何か言った。前の紳士の英語での説明によると、どうも前日コペンハーゲンで買った切符を、乗る前に駅の器械で日時を刻印しなかったのが問題だったようだ。本来だと相当額の罰金をとられるところだったが、「東京からのお客さんだから」との彼のとりなしで幸いにも事なきを得た。ありがたい！

これを機に紳士との話が弾んだ。「これから『ハムレット』の舞台となったお城を見に行くですよ」との私の言葉に彼は言った。

「それはスバラシイ。でも知ってるかい？実は作者はシェクスピアではないんだよ。デンマーク人の8割はシェクスピア作と信じてはいるけどね・・・」。

事前の資料収集のなかで、作者の真贋や著者がこのクロンボー城を実際に訪れたかどうかについて書かれているものもあったが、まさかこんな「舞台」に向かう列車の中で同じような話を聞くとはい思わなかった。

もう40年近くも前のことだが、朝日新聞で世界の文学作品の舞台を訪ねる「名作の旅」なる連載をしていた。その後、記事は上下2冊の本にまとめられた。その古い本を地元の図書館から借りてきて『ハムレット』の項を再読してみた。そこでは当時の名記者・白井健策氏も「やっぱりシェクスピアは城には来ていなかった」と結論づけ、それでもシェクスピアが新しい一つの世界を作り出した腕に驚嘆を表明している。



城の中庭——夏には野外劇が上演される

まずは何よりも自分の目で確認してみることだ！ヘルシンゴー駅から10分あまり歩くと、バルト海の岸边にそびえるクロンボー城（別名エルシノア城）に着いた。入口付近にはデンマークの国旗が高く風になびいている。城はちょうどロの字の形をして、真ん中は中庭

になっている。その石畳を舞台に、夏には野外劇「ハムレット」が上演されてきているという。



デンマーク国旗がバルト海に面してたなびく見えた。

私は物語のイメージを保とうと、塔から降りると展示室から教会へ、さらに薄暗い地下壕まで歩を運んだ。だが、自分ひとりでの探索では、母親の王妃との会話はどこの部屋でなされたのか、ポローニアスの刺された事件現場はどこなのか等はわからなかった。そこで再び入場料を払った

受付に戻ると、その日の責任者らしい男性に聞いてみた。両手を広げジェスチャー豊かに話す氏からは予期もしなかった言葉が返ってきた。

「Nobody knows! (誰もわかりませんよ)」。氏の話しっぷりからは「そんなこと言ったって、そりゃ無理ってもんだぜ!」といった少々くだけた訳が合うだろう。

なんとも“名言”だと思う。だって架空の話の舞台がどこかはわかるはずがない。それでも、これまで書かれてきた訪問記のなかには、案内嬢が「ここがオフィーリアとハムレットが言葉を交わした場所でありまして・・・」と説明された、なんて記述もある。観光地としてはそこまでサービスしないと訪問客の期待に応えられないからだろう。

昨年訪れたイタリアのベローナでも同じだった。「ロミオとジュリエット」が世界的に知られるようになってから、物語に合わせるように舞台となった家や、ジュリエットが胸の内をささやいたというベランダが作られた、という説明を聞いた。物語が、あるいは映画が売れてその舞台が観光地化するのはどこでもある流れである。それはそれで人々に想像の空間と夢を与えてよいことだと思う。

そんなことよりも、大事なのは悲劇『ハムレット』が世に送り出したメッセージである。広く知られているように、物語は、父を殺し母を奪い王位を剥奪した叔父を討つデンマーク王子・ハムレットの復讐劇である。私は現場に来る前に、ほぼ 50 年ぶりに再読したが、作品はやはり深く重かった。人生の真実を追究する、胸に刺さるような言葉が随所にある。そんな印象に残る表現のいくつかを物語の流れに沿って挙げてみる（以下は<集英社版全集>から）。

私はまずハムレットが父王の亡霊を見たという塔の上に立った。小説では寒く、暗く、不気味な荒々しい冬の城のイメージで描かれているが、ラッキーというべきか、アンラッキーというべきだろうか、初夏のスカンジナビアの空はあまりにも青く澄み、吹き抜けていく風も心地よい。のどかにカモメも飛んでいる。紺青の海を挟んですぐ向こうにはスウェーデンが

エーデンが



海岸の向こうはスウェーデン

p 123 (ハムレット) ああ、汚れに汚れたこんな肉体なんて、溶けて流れて一滴の露になっ
てしまふがいい。せめて永遠の神のきびしい掟さえなかったら自殺という手段が選べる
のに・・・

p 127 (ポローニアス) 金は借りても貸してもいかん、貸すと友情まで焦げつくことが多い
し、借り慣れると儉約の決意が鈍る。

p 151 (ハムレット) 生きるのか、生きないのか、問題はそこだ。どちらが気高い態度だろ
う？理不尽な運命のむごい仕打ちを心ひとつに耐え忍ぶか、それともあえて武器をとっ
て苦難の嵐にたちむかい、力まかせにねじふせるか。死ぬ、そして眠る——それだけの
ことだ。

p 153 (ハムレット) <狂乱状態で帰ってきて>結婚するなら持参金代わりに呪いの言葉を
くれてやるぞ——たとえ君(オフィーリア)が氷のように清純で雪のように潔白でも、
世間の中傷はまぬかれぬ。尼寺へ行け、行くんだぞ、さようなら・・・・・・

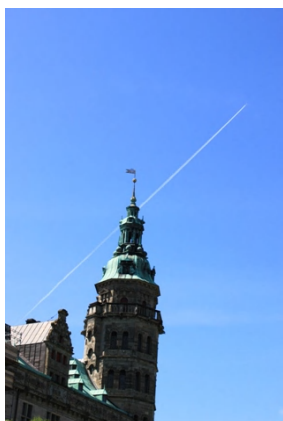
p 176 (王) 悲しみは決してひとりで攻めてこない、群れをなして押し寄せる。まず、父親
を殺され、つづいてハムレットまでいなくなった。しかも殺人を犯して自業自得、やむ
をえぬ外国行きだ。ポローニアスの死をめぐってあらぬ噂や憶測がみだれとび、泥沼を
掘り返したような始末。

p 189 (ハムレット) 土に還るとわれわれもどこまで落ちぶれるかわからんぞ、ホレイシヨ！
アレクサンダーの尊い遺骸がいつのまにか酒樽の栓になっていないものでもなし。

シェクスピアはデンマーク国民史をもとに『ハムレット』
を書き、このクロンボー城の名を不朽にとどめた。4大悲劇
の中でも最も知られた作品であり、その主人公の性格や発し
た言葉の解釈については、長い文学史のなかで、最も論議さ
れた、最も魅力的な人物の一人である。



濠に囲まれた城



ジェット機が高く

とりわけ人口に膾炙している言葉は、”To be or not to be, that is the
question!”である。

上記の引用訳のほかにも様々に訳されているが、最も受け入れられ
ている訳は、「生きるべきか、死ぬべきか(あるいは、「生か、死か」)
それが問題だ」だと思う。中世の英語を翻訳できるような力は私には
とてもないが、それでも再度、作品に目を通し、舞台の現場を訪れた
自分としてはこの部分を次のように訳してみたい。

「何が真実なのか、何が嘘なのか、それを究めるのが最重要課題であ
る」。これは、人間対人間の葛藤の中で、正義と真実を求めて懊悩す

るハムレットの生命からの叫びなのだ。そしてこの重い言葉は、今を
生きる我々にも、人生のあるべき生き方とは何なのか、本当の正義とは何なのか、根本的
な問いを投げかけているような気がするのである。